

1 子どもの運動についての質問紙から分かったこと

(1) 調査の概要

子どもの体力向上実施委員会では、本県児童生徒の運動についての意識や行動の把握・分析を行うことを目的として実態調査を行いました。

質問紙の作成にあたっては、12の質問項目を設定し（表1参照）、小学校・中学校の実態を踏まえて発達の段階に応じた設問となるように考慮しました。

回収した質問紙から運動に関する意識・行動の実態を明らかにするために、統計処理分析を行いました。

表1 調査の概要

調査方法	4件法選択回答による質問紙調査及び新体力テスト結果からの分析
調査時期	平成25年7月中旬～下旬
調査対象	小学校低学年児童（6校：360人）
	小学校中学年児童（9校：574人）
	小学校高学年児童（10校：687人）
	中学校生徒（2校：348人）
質問項目	好き：体育（運動）が好きか嫌いか
	得意：体育（運動）が得意か不得意か
	爽快感：体を動かすことが気持ちよいか
	運動量：体育で精一杯運動しているか
	自主性：体育で進んで運動しているか
	意欲：体育でやる気にみちているか
	向上心：上手にできるようになりたいか
	思考：考えながら運動しているか
	健康志向：体をじょうぶにしたいか
	生活化：学習した運動を生活でやっているか
	運動習慣：体育以外にも体を動かしているか
	日常行動：外で体を動かすことが好きか

(2) 実態調査の結果と考察

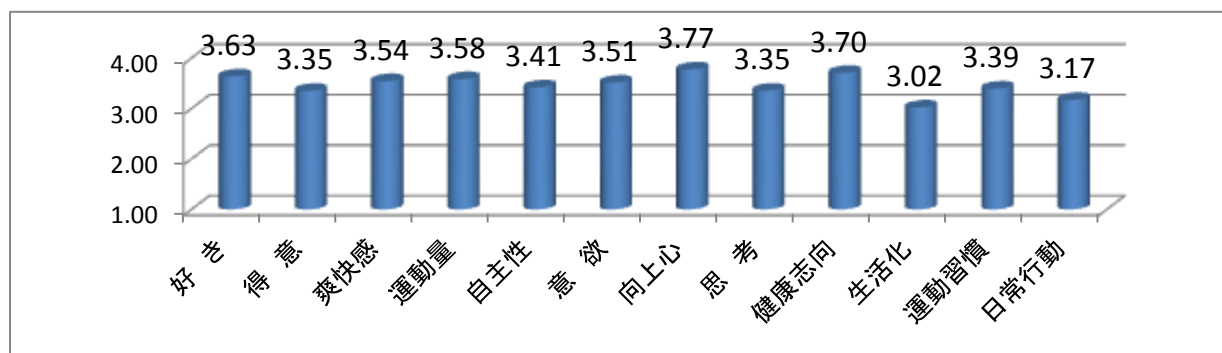


図1 小学校低学年児童の質問項目別得点（4件法平均値 N=360）

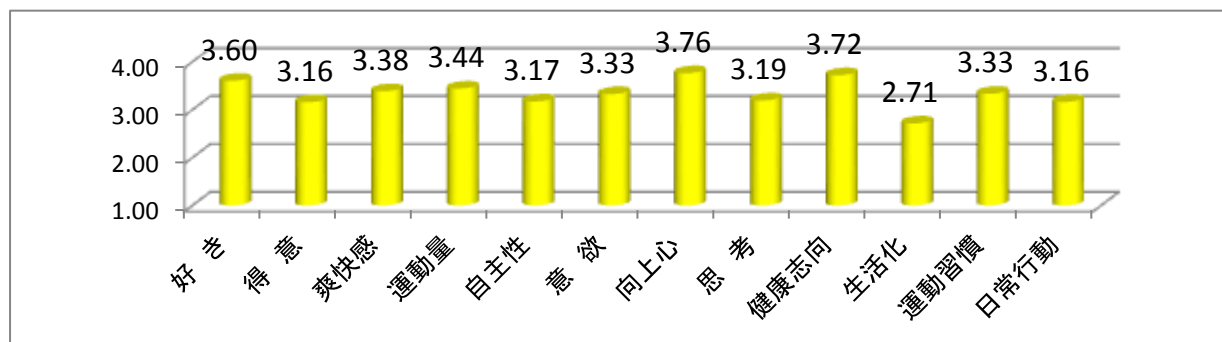


図2 小学校中学年児童の質問項目別得点（4件法平均値 N=574）

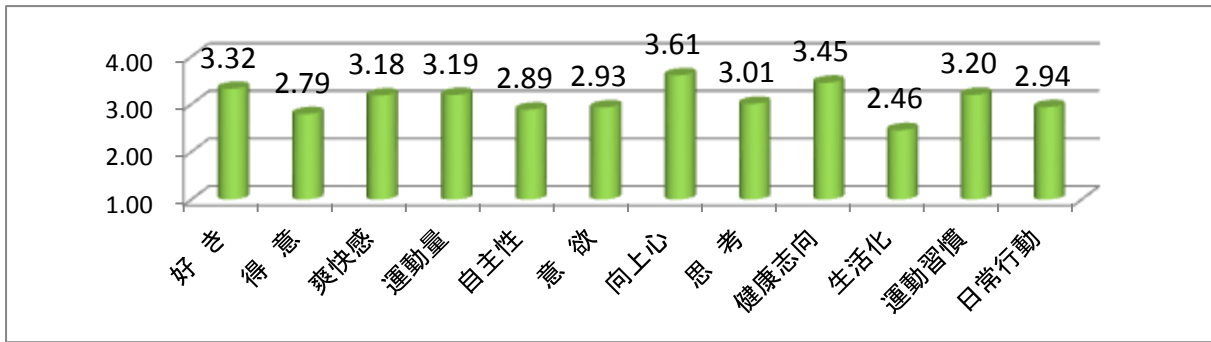


図3 小学校高学年児童の質問項目別得点（4件法平均値 N=687）

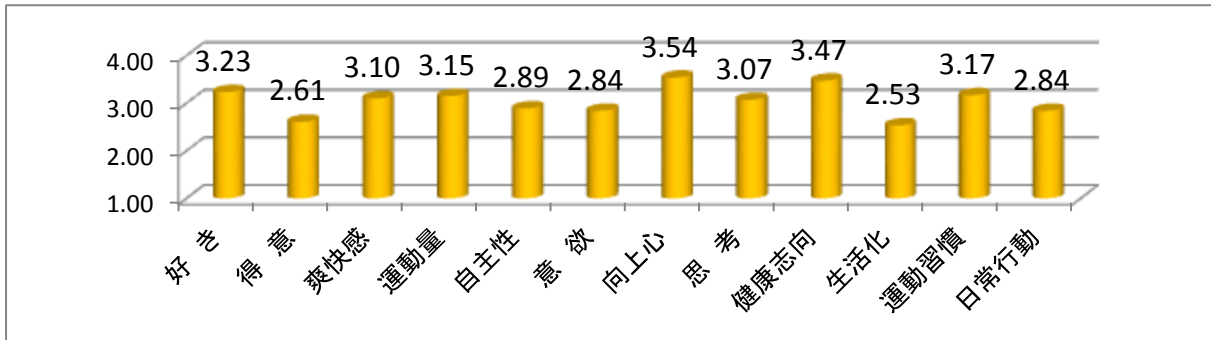


図4 中学校生徒の質問項目別得点（4件法平均値 N=348）

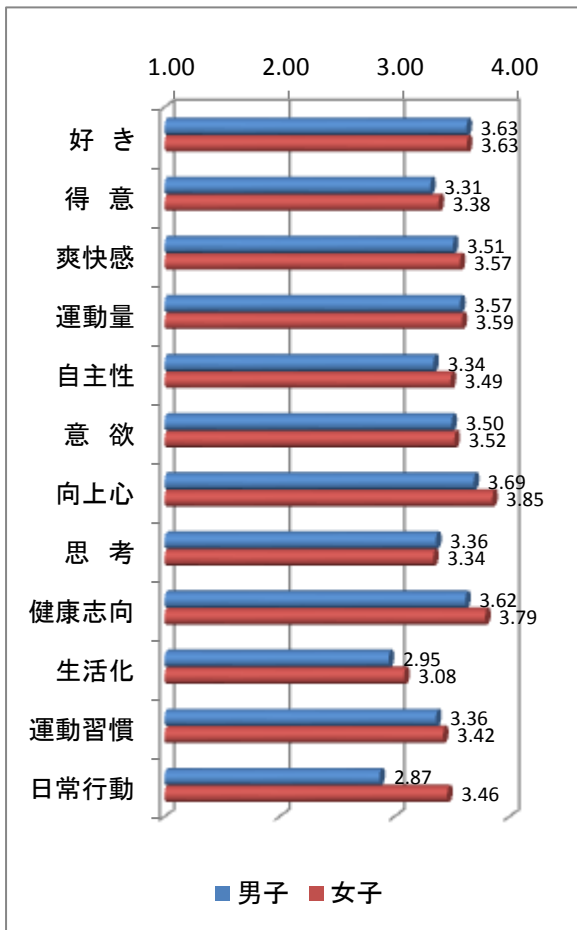


図5 小学校低学年児童男女別の質問項目別得点（4件法平均値 N=348）

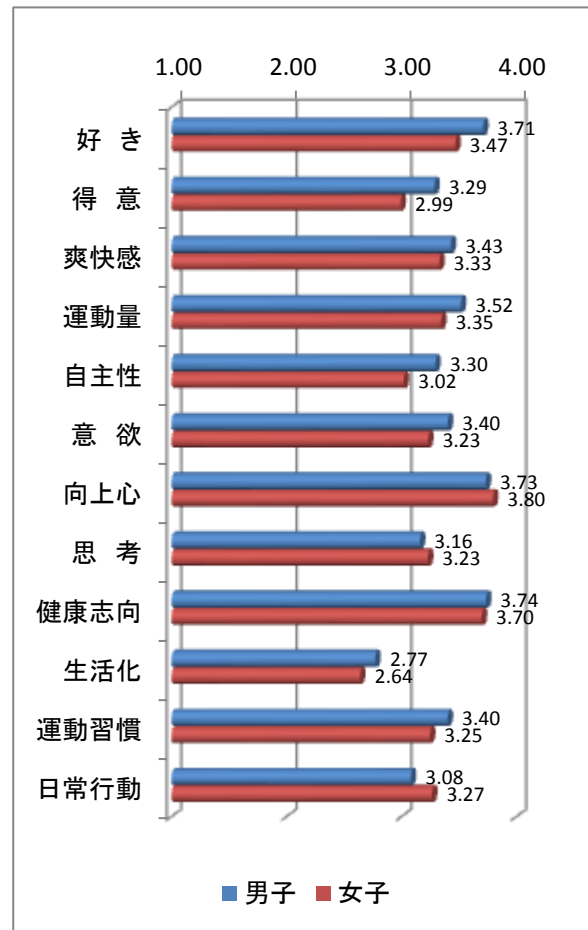


図6 小学校中学年児童男女別の質問項目別得点（4件法平均値 N=574）

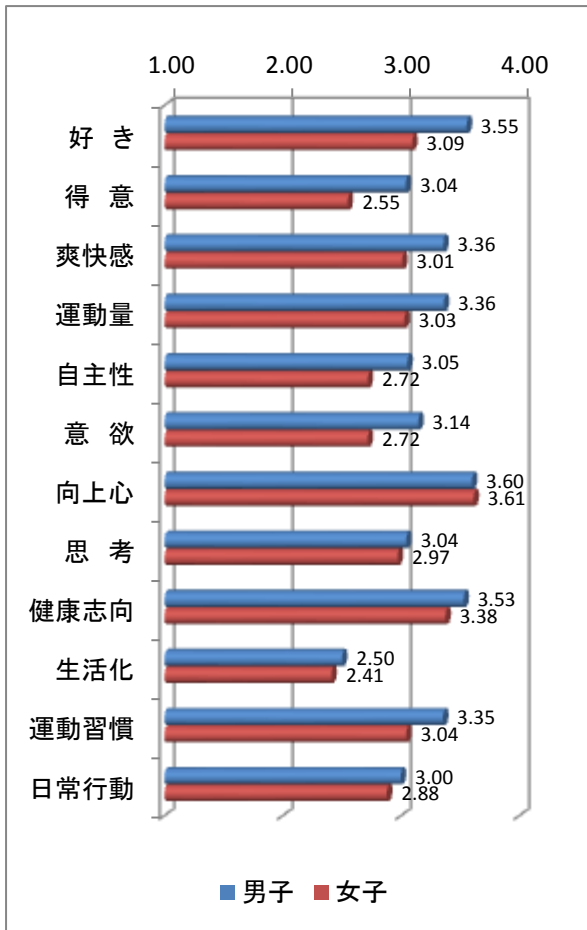


図7 小学校高学年児童男女別の質問項目別得点（4件法平均値 N=687）

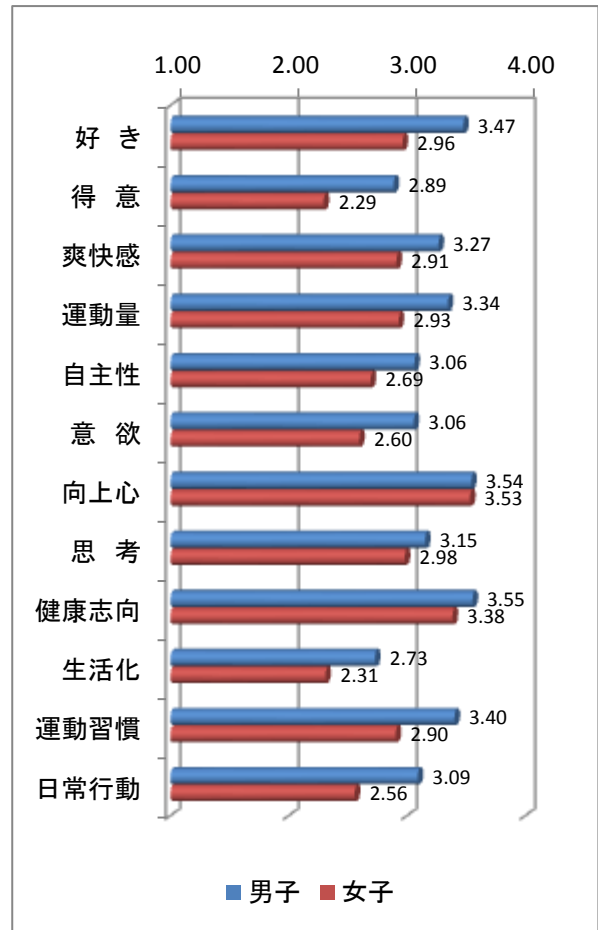


図8 中学校生徒男女別の質問項目別得点（4件法平均値 N=348）

図1～8の項目別平均値から、次の点が本県児童生徒の傾向として考察されます。

- 学年段階が上がるにつれて、運動に関する意識や行動は低下している。
- 小学校中学年以降で女子の意識・行動の低下が見られ、学年が進むにつれ男女差の差が大きくなる傾向がある。
- 小学校高学年以降で、女子の日常行動が下がっている。
- 運動が好きな児童生徒の割合と比較して、得意と感じている割合は少ない。
- 上手にできるようになりたいという向上心は、多くの児童生徒が持っている。

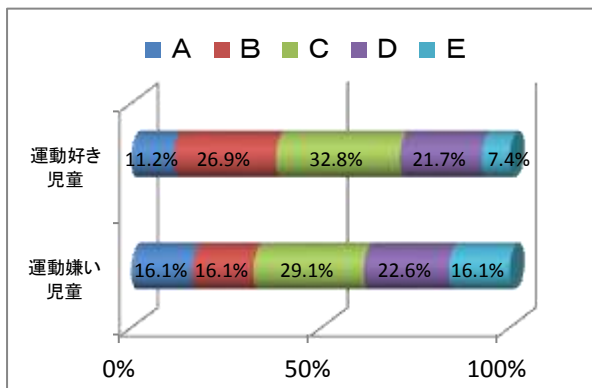


図9 小学校低学年児童の「好き」と新体カテスト総合判定結果とのクロス集計（N=348）

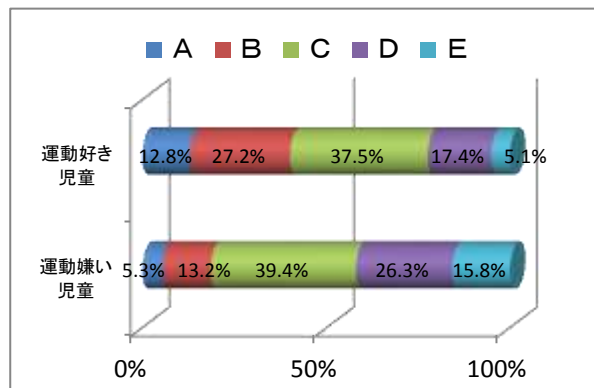


図10 小学校中学年児童の「好き」と新体カテスト総合判定結果とのクロス集計（N=574）

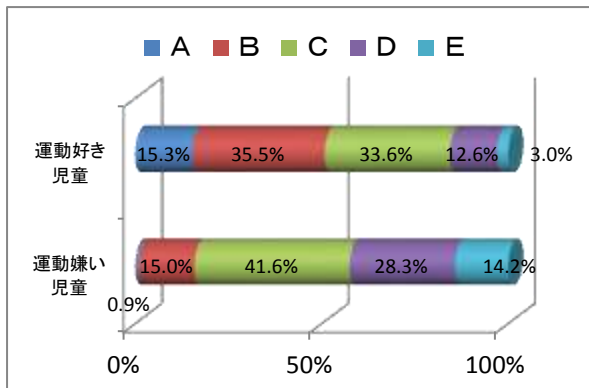


図 11 小学校高学年児童の「好き」と新体カテスト総合判定結果とのクロス集計 (N=687)

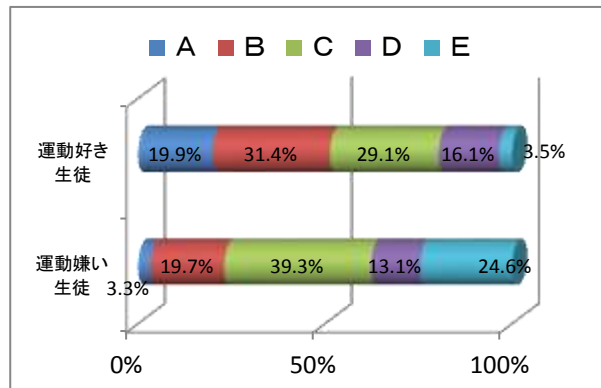


図 12 中学校生徒の「好き」と新体カテスト総合判定結果とのクロス集計 (N=348)

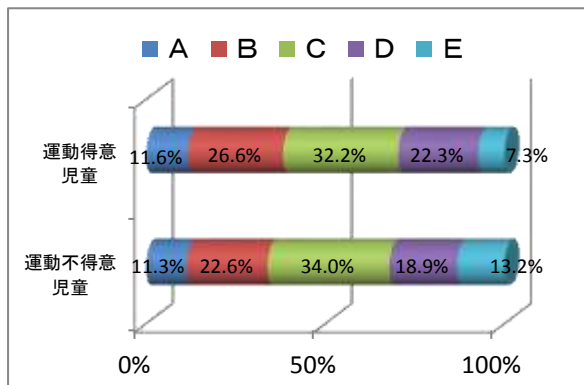


図 13 小学校低学年児童の「得意」と新体カテスト総合判定結果とのクロス集計 (N=360)

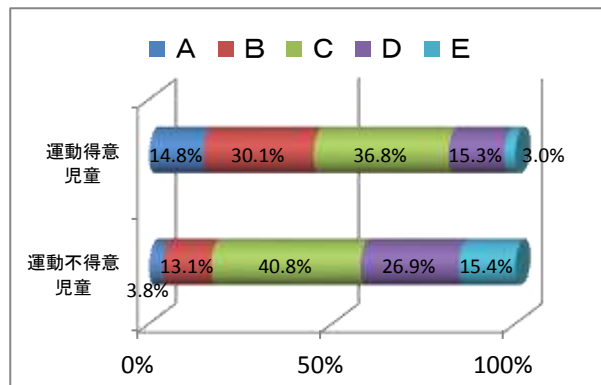


図 14 小学校中学年児童の「得意」と新体カテスト総合判定結果とのクロス集計 (N=574)

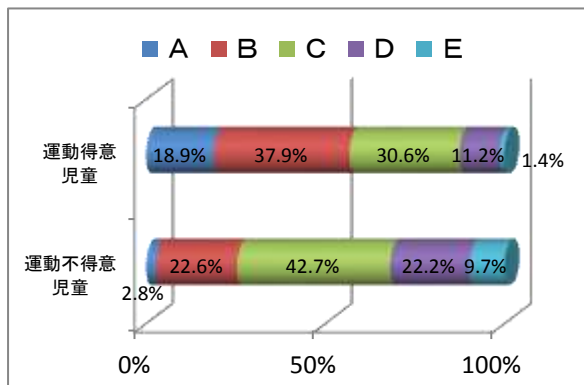


図 15 小学校高学年児童の「得意」と新体カテスト総合判定結果とのクロス集計 (N=687)

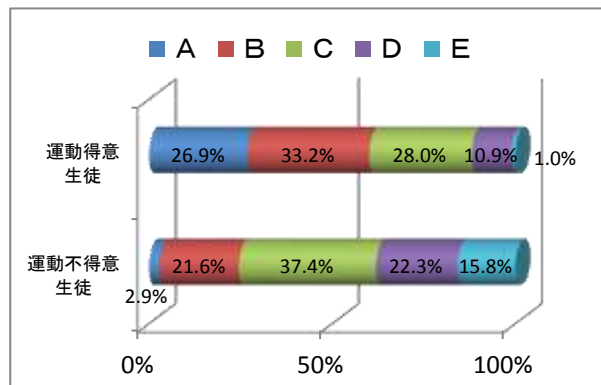


図 16 中学校生徒の「得意」と新体カテスト総合判定結果とのクロス集計 (N=348)

- 図 9～12 の「好き」と新体カテスト総合判定のクロス集計から、次の点が考察されます。
- 小学校低学年では、運動の好き・嫌いと運動能力の関係性は低い。
 - 小学校低学年では、運動の得意・不得意と運動能力の関係性は低い。
 - 小学校中学年以降では、運動が嫌いな児童生徒に占める、運動能力が低い児童生徒の割合が高くなる傾向にある。
 - 小学校中学年以降では、運動が不得意な児童生徒に占める、運動能力が低い児童生徒の割合が高くなる傾向にある。
 - 小学校高学年以降では、運動能力は高いが、運動を不得意と感じている児童生徒の割合が増える傾向にある。

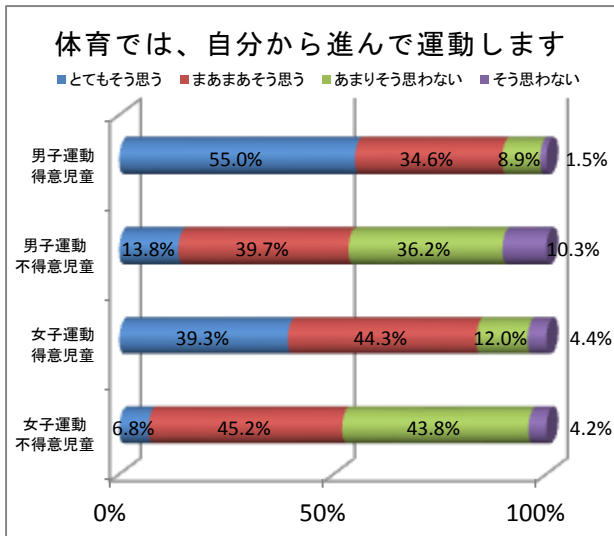


図 13 小学校中学年児童男女別の「得意」と「自主性」のクロス集計 (N=574)

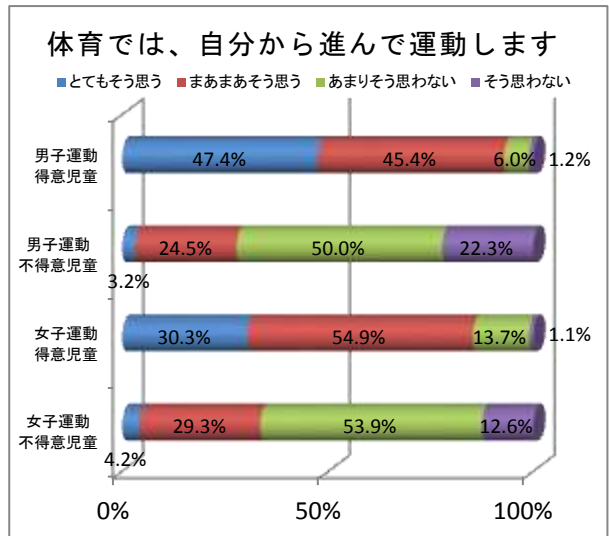


図 14 小学校高学年児童男女別の「得意」と「自主性」のクロス集計 (N=687)

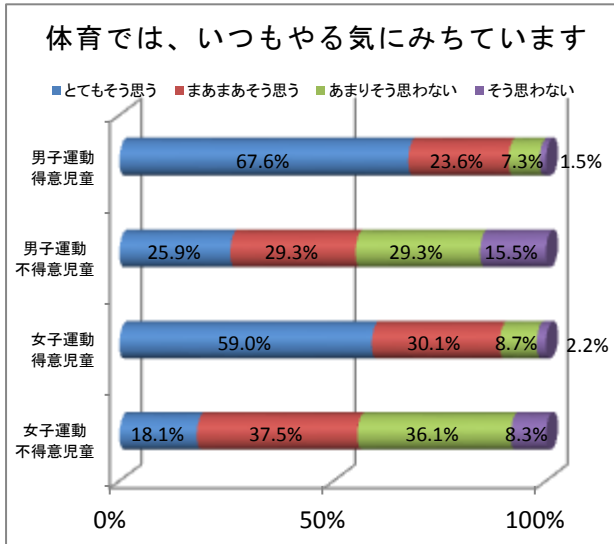


図 15 小学校中学年児童男女別の「得意」と「意欲」のクロス集計 (N=574)

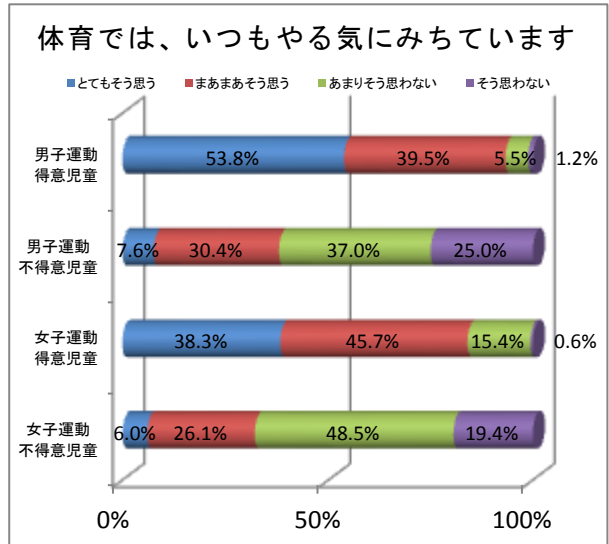


図 16 小学校高学年児童男女別の「得意」と「意欲」のクロス集計 (N=687)

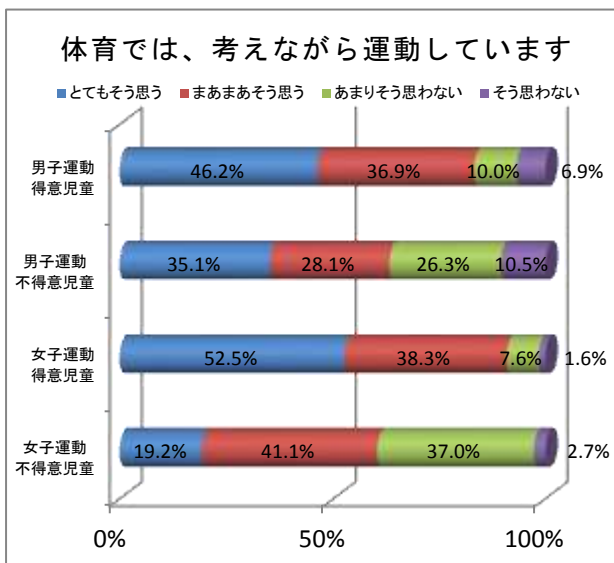


図 17 小学校中学年児童男女別の「得意」と「思考」のクロス集計 (N=574)

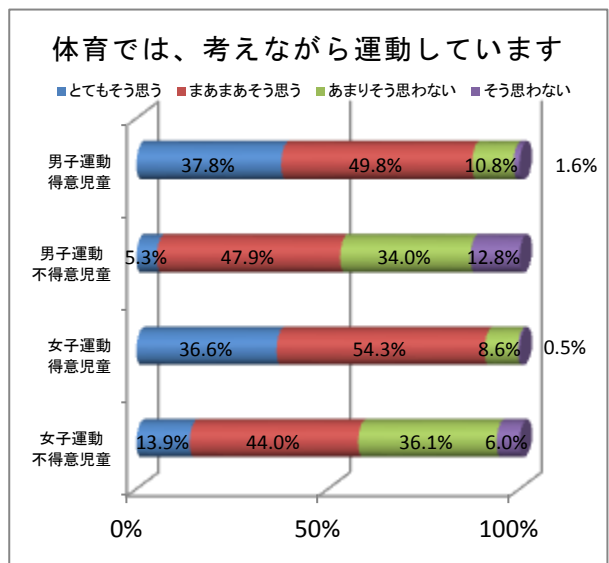


図 18 小学校高学年児童男女別の「得意」と「思考」のクロス集計 (N=687)

図 13～18 は、小学校中学年・高学年児童を男女別に、「得意」と体育授業場面での「自主性」「意欲」「思考」をクロス集計したものであり、次の点が考察されます。

○「自主性」「意欲」に関しては、運動を不得意と感じている児童ほど、数値が下がり、学年が進むとその傾向が大きくなる。

○考えながら学習に取り組む「思考」では、不得意と感じている児童も半数以上がどうしたら上手にできるか考えており、「向上心」の数値が高いことと一致する。

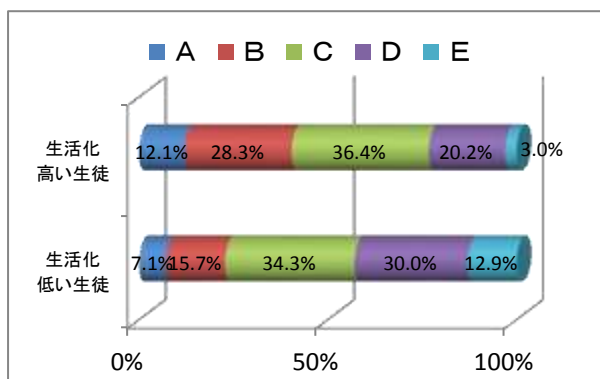


図 19 中学校男子生徒の「生活化」と新体カテスト総合判定結果とのクロス集計 (N=183)

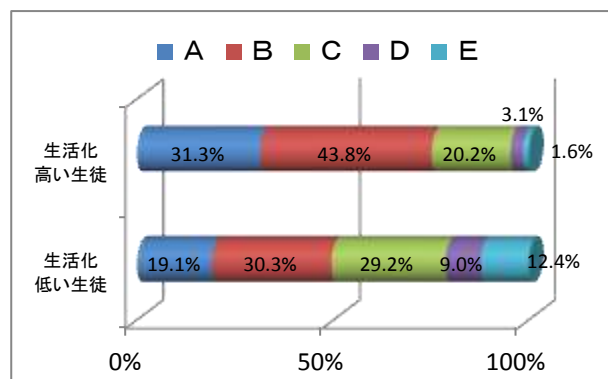


図 20 中学校女子生徒の「生活化」と新体カテスト総合判定結果とのクロス集計 (N=165)

図 19・20 は、中学校生徒が、運動を休日などにやってみる「生活化」と新体カテスト総合判定結果を男女別にクロス集計したものである。

○男子は、運動能力が高い生徒ほど運動の生活化が行われている。

○女子は、運動能力が高い生徒でも、運動の生活化まではいたっていない。

(3) 実態調査の結果から

本県の子どもの、運動についての実態調査から、今後各学校において体力の向上に取り組む際の視点として以下のような点が考えられます。

①低学年での体育で「運動が楽しい」と感じられる授業を行いましょう。

中学年以降、「運動が嫌い」「運動が不得意」な児童の割合が増えてきます。そこで、低学年時期の「運動が楽しい」という体験が重要となってきます。「易しい運動遊びを通して運動の楽しさを十分に味わわせること」が大切です。

②女子児童生徒の「運動への肯定感」を高める取り組みをしましょう。

中学年以降、女子の運動に対する意識や行動の低下が見られます。個に応じた指導を行うこと、易しい場や活動を設定すること、称賛や励ましなどの言葉かけをすることなど、女子児童生徒に対する意図的・積極的なかかわりが必要です。

③「体育は好き」から「体育は大切」になることを目指していきましょう。

運動ができた喜び、運動のコツやポイントが分かった喜び、運動を通して友達とかわった喜びなど、体育にはたくさんの魅力があります。児童生徒が、生涯にわたってスポーツ参加や健康の保持増進、体力の向上に取り組んでいけるように、体育は大切だと実感できる授業づくりが重要です。